

特別支援学校における音楽的な見方・考え方を 働かせた音楽科授業の研究

—特別支援学校小学部低学年において
実践した音楽遊びの授業分析から—

学籍番号 219342

氏名 辻本 みのり

主指導教員 浦田 恵子

副指導教員 藤本 佳子

1. 問題の所在と研究の目的

中央教育審議会答申(2016)において、子どもたちに必要な力を確実に育むことが出来るよう、資質・能力の3つの柱として、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等が示された。特別支援学校においても音楽科の見方、考え方を働かせられる指導を行うためには、音楽遊びや身体表現の活動を通して音楽を形づくっている要素を学習できるような、創意工夫が必要である。

これまで特別支援学校音楽科の表現の活動に関する研究は多く存在するが、特別支援学校学習指導要領で示されている第1段階を対象とする児童に対して、第2段階以降の身体表現等につながる音楽遊びの具体的な指導方法について言及されている文献は少ない。そこで本研究では、特別支援学校小学部の低学年の児童を対象に音楽科の授業実践を行う。その際、長坂ら(2019)の発達段階に合わせた子どもの主体的表現を引き出す方法を参考にしながら、音楽を形づくっている要素を指導内容として1つに定め、「音楽遊び」の活動を行うこととする。実践の記録を基に、児童が音や音楽に触れ、どのように身体を動かしたり声を出したりして、「表出」や「再現」を始めとする表現につながるような動きを示していたかについて分析を行う。またそれを基に、知的障害のある児童が通う特別支援学校小学部の第1段階音楽科授業において、どのような指導が有効であるのか、具体的な方法について検討する。

2. 研究の方法

2.1 対象

知的障害のある児童生徒が通う特別支援学校小学部低学年の2021年度1組4名、2022年度1組4名、2023年度1組6名を対象とした。

2.2 実践内容

それぞれの単元において1つの音楽を形づくっている要素を指導内容として定め、音楽遊びの実践を行った。

(1)2021年度2学期(計4時間)

指導内容:強弱(大小)

教材:〈おおきなたいこ〉作詞:小林純一 作曲:中田喜直

(2)2022年度1学期(計4時間)

指導内容:速度

教材:〈ばすごっこ〉作詞:香山美子 作曲:湯山昭

(3)2023年度2学期(計4時間)

指導内容:強弱(大小)

教材:〈ちいさいうみ おおきいうみ〉 作詞・作曲:新沢としひこ 編曲:高橋亜土

2.3 分析方法

本研究においては、研究授業の全活動過程の逐語記録を資料として、児童の音や音楽に対する反応や変化を分析するという方法をとった。また、また授業分析を行うにあたって、実際の児童の反応や変化に対しての分析が筆者の視点だけで主観的になってしまうことを防ぐため、2022年3回目の実践以降、T2～T4の教員に質問紙調査を行った。

今回の実践における授業分析は以下の視点に着目して行うこととする。

- (1)それぞれの児童が音や音楽に気づき、表出、表現しようとしている部分はどこか。
- (2)音や音楽の気づきに対して児童がどのように表出、表現しようとしているのか。
- (3)児童のそれらの動きの要因は何か。
- (4)その他、音や音楽に関する以外のことも含め、児童が意思の表出や表現を行っていると思えらる場面

3. 結果と考察

授業実践全体を通して、単元ごとに学習する音楽的な要素を1つに定めて実践したことで、ただ音や音楽に触れることを楽しませるだけでなく、音楽的な学習を意識した実践につながったと考える。それぞれの単元において、児童1人ひとりが音楽の要素を意識した表出、表現しようとしている姿を捉えることができた。実践研究において明らかとなった、児童が音楽の要素をとらえ表現につなげるための指導方法で重要な観点を3つ挙げる。

1つ目は、指導内容として音楽を形づくっている要素を定めて実践を行う上で、聴覚以外の感覚においても音楽の要素が分かるように指導を工夫することである。音楽を聴いて要素を感じ取るだけでなく、視覚的に示すことや、音楽に合わせた身体の動きを通して音楽の要素に気づけるようなアプローチを行うことが重要である。2つ目は、同じ楽曲を繰り返し使用して学習経験を積むことである。三小田(2020)も、「音楽の授業に身体表現を取り入れる際には、感覚的にとらえることができるようになるまで、繰り返し行うこと、そして、体の改善に努めることが重要である。そこで、音楽の授業のさまざまな活動において系統的にそして継続的に取り入れていかなければならない。」としている。したがって使用する楽曲をじっくり味わい、表現を深めるためには繰り返しその音楽を聴いて活動する経験を積み重ねることが重要である。3つ目は、児童1人ひとりの実態に応じて適切な言葉かけ、支援等を行うことである。実践を続けていくうちに、児童の得意な身体の動きや、声の出し方等をより深く理解できるようになった。児童それぞれが得意とする動きや傾向が分かっていたら、それを生かしてさらに表現を深めることにつながる。そのためには、児童それぞれの表出しやすい身体の動きや掛け声等を把握したうえで適切に指導者が合理的配慮や指導を行う必要がある。

最後に、特別支援学校の音楽科授業において、系統性のある音楽的な見方・考え方を働かせる授業実践を行うため、特別支援学校小学部知的障害者用の教科書を使用すること、音楽的な要素を指導内容として定めることを提案したい。上記3つの観点を重視し、さらに実践を重ねることで、児童の主体的な表現を引き出すことにつながり、より音楽的な見方・考え方が深まる授業が展開されることを期待する。